

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告

鈴木哲雄

この報告書は文部省科学研究費補助金（国際学術研究）

一 旅程

による

「中国における仏教の伝播経路に関する実態調査」

(The Studies and Research on the History and Development of Buddhism in China)

研究代表者 鎌田茂雄（愛知学院大学）

研究分担者 鈴木哲雄（愛知学院大学）

「実践仏教の伝播に関する研究」

実施期日 平成二年（一九九〇）七月十七日から七月三十一日まで

主として中国陝西地方の禅宗史蹟を実地踏査した記録である。

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

七月十六日（月） 成田空港、ニアーポートレストハウス泊
七月十七日（火） 曇天。十時成田空港発、日本航空JL七八一便。十四時（サマータイム）北京国際空港着。十六時十七時天壇見学。天壇飯店で夕食。十八時三十分京倫飯店着、泊。

七月十八日（水） 曇天。西安は快晴。九時人民大会堂、故宮見学。十一時三十分南大門峨眉山飯店で昼食。十三時十四時地壇見学。十六時十五分北京空港発二六〇四便。十八時西安空港着。十八時三十分西安賓館着、泊。（中國西安海外旅遊公司日本部長梁雪松、白利軍両氏と予定検討）。

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

七月十九日（木）快晴。七時三十分出発、八時五十分～十時二十分陝西師範大学唐代歴史研究所（西安市南郊）において、社会科学院代表者表敬訪問、会談。十一時～十二時青竜寺見学。十二時三十分電影大酒店昼食。十二時二十分～十四時三十分大雁塔見学。十四時四十五分～十五時十五分大興善寺見学。十五時二十分～十六時二十分小雁塔見学。十六時四十五分西安賓館着、泊。本日の案内者は梁雪松部長であつた。

七月二十日（金）薄曇。七時三十分西安賓館出発。十時三十分法門寺（扶風県）着、見学（西安賓館より百二十キロ）、門前の食堂で昼食。十二時三十分法門寺出発、十五時賢山寺（扶風県）着、見学（法門寺より六十四キロ）。十五時五十分賢山寺出発、十七時岐山県通過。十七時四十五分鳳翔東湖着。十八時鳳翔着、調査（賢山寺より八十キロ）。十九時十五分鳳翔出発、二十時十五分宝鷄市招待所着、泊。外食（鳳翔より四十五キロ）。

七月二十一日（土）曇天。八時三十分宝鷄招待所出発。十一時隴県着（九十二キロ）。白馬寺跡、開元寺跡見学。隴県招待所昼食。途中千陽の白利軍氏の実家で休憩。宝

鷄市内金台觀（道觀）見学。十七時三十分宝鷄賓館着、泊（往復百八十八キロ）。

七月二十二日（日）小雨。八時五十五分宝鷄賓館出発。秦嶺大散関、竜口通過、十時三十分鳳縣着休憩。十四時三十分張良廟着。廟前食堂で昼食。張良廟見学。十五時出发。崖崩れ多発、約二時間渋滞。十九時三十分漢中政府招待所漢中賓館着、泊（行程二百五十五キロ）。

七月二十三日（月）小雨。八時三十分漢中賓館出発。梁山（中梁山）乾明寺（南鄭県）見学（梁山山麓まで十六キロ）。道路悪し。十一時十五分出発、十二時三十五分牛頭寺（褒城県）約二キロ手前で望み、訪ねること断念（道路状況が非常に悪いため）（梁山山麓より老道寺下車まで三十一キロ）。老道寺（地名）にて昼食。十四時二十分漢中賓館着、泊（本日の行程九十キロ）。

七月二十四日（火）快晴。七時四十五分漢中賓館出発、途中工事のため迂回、十時十分石泉県政府弁公室副主任辛建氏並びにわざわざ安康より安康地区外事弁公室主任兼安康地区旅遊局局長上官衛国氏の出迎えを受け、会談、見学予定地を定める。昼食。十四時三十分出発。十五時

十五分安康市着（石泉県より百八キロ）。湿気多く、三十八度以上の猛暑。万春寺跡見学。金堂寺訪問。住持観文老師と会談。新羅寺跡を確かめる。二十時三十分安康招待所着。二十一時上官氏接待の宴会、泊。

七月二十五日（水）快晴。九時安康招待所出発、途中道路修理で三十分渋滞、十九時三十分西安賓館着、泊（石泉より二百五十三キロ、安康より三七四キロ。子午関経由）。七月二十日より本日までの同行は白利軍氏であった。

七月二十六日（木）快晴。下痢・風邪・微熱で午前中休息。梁雪松日本部長、通訳曹笑陽さんと日程をつめる。十四時大明宮麟德殿跡見学。十五時三十分西安賓館着、泊。

曹笑陽さんの案内であった。

七月二十七日（金）晴。九時西安賓館出発。九時三十分長安県、九時四十分興教寺着、見学。住持、全国仏教協会理事常明老師に会見（長安県より十二キロ）。十時二十分出発、華嚴寺跡見学（興教寺から長安県方向に九キロ）。十時五十分出発、十一時五分長安県に戻り（この間三キロ）、十一時二十分香積寺着。見学（長安県より八キロ）。十一時三十五分出発、十一時五十五分長安県に戻り、市

内の食堂で昼食。十三時出発、草堂寺着、見学（長安県より三十二キロ）。十五時西安賓館着、泊（草堂寺より五十キロ）。本日の案内は陝西旅遊總公司副經理王新生氏であった。

七月二十八日（土）晴。八時三十分西安賓館出発。九時五十分藍田県水陸庵（＝悟真寺）着、見学（藍田県東南十五キロ、賓館より五十四キロ）。十時四十分出発。十一時五分藍田県まで戻り、玉山慧福の住した玉山がどの辺か搜す（藍田より十八キロ）。十一時五十分出発、十三時十分西安に戻り、市内食堂で昼食。碑林見学。十五時三十分西安賓館着、泊（本日の行程百六十四キロ）。案内者は梁雪松氏であった。

七月二十九日（日）晴。九時西安賓館出発、兵馬俑見学。驪山華清宮見学。十二時二十分西安海外旅遊總公司副經理李兵、日本部長梁雪松両氏及び中國旅遊報特約記者馬珂氏、曹笑陽さん、全行程の運転手をつとめてくれた張氏とて、旅遊社の招待で昼食。記者の取材を受ける。昼食後、西安城壁上を案内してもらう。シルクロードの起点である。十四時二十分西安空港着。十五時四十分CA一二〇

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

二便にて出発、十七時二十分北京空港着。空港付近で夕食。十九時京倫飯店着、泊。

七月三十日（月） 曇。河北房山県房山雲居寺見学。京倫饭店泊。

七月三十一日（火） 薄曇。戒台寺、月壇公園見学。十六時北京空港発JL七八二便、十九時五十分成田着。

二 調査

1 隊陝師範大学唐代歴史研究所における社会科学院代表者との会談内容

出席者

- 史念海教授（中国唐史学会顧問、陝西師範大学唐史・歴史地理研究所長）
牛致功教授（中国唐史学会副会長、西安唐代文化史学会会長、陝西師範大学唐史研究所教授）
李之勤教授（中国唐史学会理事、西安唐代文化史学会副会长、西北大学西北史研究室教授）
曹爾琴教授（中国唐史学会理事、西安唐代文化史学会副会长、陝西師範大学歴史系主任）
趙文潤教授（中国敦煌学会理事、魏晋南北朝史学会理事、

上官鴻南教授（陝西師範大学歴史研究所副所長）
会談の中で次の点について教えられる。
○法門寺の歴史上重要価値
○彬県大仏寺について
○延安付近の小仏寺について（破壊多し）
○陝西地方の石窟

○九月に法門寺仏教研究会（総合）の行なわれること（招待を受けたが辞退）

- 麦積山——蘭州炳靈寺——トルファン千仏洞——ウルムチの一連の泥仏の関連
○陝西郊外八大寺仏教寺院（青竜寺、慈恩寺、興教寺、白塔寺等）
○白塔寺発見の内容
○道安洞（釈道安に関する遺蹟）の二つあつたこと
○章敬寺は通化門外にあつたこと（城外南郊のものは宋代のもの）

終つて記念写真撮影

a 史念海主編『中国歴史地理叢書』

b 『中国唐史学会 会刊』第一期（一九八四年三月）より第九期（一九九〇年三月）まで。内、第四期欠本。

計八冊
(以上寄贈さる)

2 青竜寺

青竜寺には禪僧が住したことは伝わっていない。ただしわが弘法大師空海が八〇四年渡唐し、ここで惠果阿闍梨より学んで、五部の灌頂及び伝法阿闍梨位を受け、遍照金剛の称号を授かった。翌年惠果が入寂したが、碑記の撰及び書は空海になるものであった。日本の真言宗各派總大本山会が大師入定千五百年を紀念して、一九八三年に元青竜寺東塔院の遺跡址に「惠果空海記念堂」を建て、碑記が立てられた。

青竜寺はもと隋の靈感寺で、開皇二年（五八二）に立った。文帝は都を移し、城中の陵墓を堀り、これを郊外に葬り、よってこの寺を置いた。景雲二年（七一）名を青竜と改めたのである。武徳四年（六二一）廢されたが、竜朔二年（六六二）城陽公主（太宗の女）⁽²⁾がまた奏して立て觀音寺とした。⁽³⁾『長安寺院史料の集成と研究』では、青竜とは四神のうちの東方の蒼竜にちなんだ付名であろうと想定さ

れている。

(1) 清、雍正一三年刊、沈青崖・吳廷錫等撰『陝西通志統通志』卷二八、二六右。

(2) 徐松撰『唐兩京城坊攷』卷三、三一左。

(3) 井ノ口泰淳『長安寺院史料の集成と研究』(文部省科研費報告、昭昭六三年三月)一〇一頁。

3 大慈恩寺

大慈恩寺には大雁塔があり、国内外で親しまれている。ここには北宗の玉泉神秀（六〇六—七〇六）の弟子の西京義福（六五八—七三六）が住していた。

慈恩寺は城南十里の曲江池の北にある。唐の高宗（六四九—六八三在位）が文徳皇后のために建てたもので、内に

浮団塔六級があり、すなわち今の雁塔である。慈恩はもと隋の無漏寺で、貞觀二十一年（六四七）高宗が春宮にあるとき、（生母の）文徳皇后のために建て、永徽三年（六五一）沙門玄奘が起塔した。はじめは五層で、表は磚、心は土で、西域の窣堵波にならつたもので、袁宏漢のいわゆる浮団祀であった。長安中（七〇一一七〇五）摧け倒れたので、天后（六八四—七〇四在位）及び王公が錢を施して重

ねて営建し十層としようとした。雁塔は、天竺に迦葉仏伽藍があり、石山を穿つて塔五層を作り、最下の一層は雁形にしたので、雁塔というのである。兵余は止めて七層とした。⁽¹⁾外は方形で、方は約四十五メートル、高さ約四メートルの台座の上にある。下四層は七間となり、上三層は五間となつていて、塔は台座共で高さ六十四メートルである。

塔の南門の東西両側に褚遂良が書いた「大唐三藏聖教序碑」と「述三藏聖教序記碑」がある。現在の建物は、明清両代のものである。全国重点文物保護単位となつていて。

『唐兩京城坊攷』卷三では、晋昌坊（進昌坊）の東半分が大慈恩寺で、別に『寺塔記』を引いて、もと淨覺寺の故伽藍について営建したと述べているが、『長安寺院史料の集成と研究』（五四頁）では、後の慈恩寺の境内に、かつて淨覺、無漏の両寺が存在していたのかもしれない、と述べている。

玄奘は大慈恩寺が造営されると、弘福寺から招かれて移り、五十人の高僧の上座となり、顯慶三年（六五八）まで十一年間ここに住して、境内西北の翻經院で訳業を続け、西明寺が建てられるとそちらに移った。その後、慈恩寺に

住した僧は慈恩大師基・神昉・道洪・義褒・道世・靖万・嘉尚・神楷・惠立・普光・義忠・彥悰・法寶・慧沼、更には淨土教の善導そして禅宗の義福も住していた（同五五頁下参照）。

そこで禅宗の義福について考えてみたい。義福（六五八—七三六）は西京、長安、慈恩、いずれを冠して呼んでもよい。『楞伽師資記』では長安蘭山義福禪師としている。しかしども蘭山という山は見受けない。恐らく藍田山のことであろう。蘭と藍は同音である。楞伽師資記には藍田玉山恵福も同じく名が挙がっており、藍田県の玉山は一名藍田山ともいわれていたから、ほぼ時を同じくして義福と恵福が藍田山即ち玉山に住していたのである。それ故蘭山は藍田山のことと言つてよからう。

義福の名が最初に出てくる書物は『楞伽師資記』で、玉泉神秀の弟子として、嵩山普寂・嵩山敬賢・蘭山義福・玉山恵福が雁行し、神秀より付嘱せられた、としている。『宋高僧傳』卷九に、京兆慈恩寺義福伝があり、まとまつた独立の伝記である。しかし現在、西安の碑林に保存されている嚴挺之の「大智禪師碑銘并序」、陽伯成の「大智禪師碑陰

記」が根本資料で、『唐文拾遺』卷十九に載せる杜昱の「大智禪師塔銘」も根本資料とされている。

『碑銘』は『全唐文』卷二百八十に載っているし、『碑陰記』も同卷三百三十一に載っており、また『金石萃編』卷八十一などにも載っている。碑銘によつて義福について述べてみよう。

義福は上党銅鞮（山西沁県西南）の人で、十五歳、鄆において在俗ながらも清浄の律行を奉持した。遠く尋ね、汝南中流山靈泉寺で法華經・維摩經を読んだ。また都の福先寺（洛陽延福坊）で朏法師に広く大乘經典を学んだ。朏法師とは『伝法寶紀』の作者、長安の杜朏（字は方明）のことであるとみられている。時に嵩山の法如大師が不思議の要用を演べていると知り、至ったが、法如は既に入寂して落胆し、追蹤経行した。載初（六九〇年）、三十三歳落髮具戒し、そして荊州の玉泉寺に大通禪師（神秀）のいる

を知つて投じた。積年鑽求して確然大悟した。十年隨侍し、大通禪師が東都の天宮寺に召され、ついで病に臥したが、つねに左右にあり、密かに伝付され、正法を弘通する人はこの人だ、といわれた。神龍の歲（七〇五・七〇七）、迎え

「実踐仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

られて嵩山の嶽寺から終南の化感寺（宋高僧伝では藍田化感寺という）に住し、法堂を置いた。⁽²⁾ そして道俗を教化し、先師の業を開演した。開元十年（七二二）長安の道俗が請うて慈恩寺に住せしめた。十三年玄宗皇帝が河洛を巡り、特に命じて洛陽の福先寺に居せしめ、十五年京師に帰った。二十一年（七三三）恩旨により竜興寺に入らしめたが、帰向する者は数えられないほどであった。二十三年秋八月病を示し、明年夏五月二十五日入寂、七十九歳であった。皇帝は使をつかわし、大智禪師と謚した。碑銘は中書侍郎嚴挺之が撰し、史惟則の書と篆額で、史子華が刻字し、開元二十四年（七三六）九月十八日に「大唐故大智禪師碑銘并序」の碑が立つた。「大智禪師碑陰記」は碑の文及び書のすばらしさを讃えたもので、河南少尹陽伯成の文、伊闕縣尉史惟則の書になり、開元二十九年五月十八日に成つた。

補、竜興寺

ここで慈恩義福が晩年恩旨によつて住した竜興寺についてふれておく。

竜興寺は頌政坊にあつた。頌政坊は皇城の西門である安福門と順義門の西側である。隋に惠雲・澄覺の二寺があつ

たが、大業七年（六一）共に廃された。竜興寺はもと普光寺といい、貞觀五年（六三）太子承乾が立てたもので、神龍元年（七〇五）両京及び諸州に中興寺を置き、そこでこの寺を中興寺と改め、ついで竜興寺と改めたものであつた。西北隅はもと隋の惠雲寺で旧仏殿があつた。また「大智禪師碑」を引いて、「開元二十一年恩旨、復令入都、至南竜興寺、曰、此人境之靜也、遂留憩焉」という。⁽³⁾これについて『長安寺院史料の集成と研究』（一三七頁上下）では、洛陽の竜興寺のことでの『城坊攷』の撰者徐松の誤りとしている。それはどうであろうか。「復令入都、至南竜興寺」とは、開元十五年洛陽福先寺から京師慈恩寺に帰ったあと、太極宮の至南（実は西南）、すぐ近くに住せしめたことを言い、長安の竜興寺が文意にふさわしい。洛陽の竜興寺は延慶坊にあり、皇城の前を流れる洛水を隔てた南側の最も東側にある坊にあつた。洛陽の竜興寺では碑文の文意が通じ難い。もつて義福がいかに崇敬されていたかを知ることができる。

開元八年には荷沢神会が南陽の竜興寺に勅住しており（『宋高僧伝』）、間もなく北宗批判がはじまつた。開元十八

年から二十年にかけては、滑台大雲寺（河南滑県）で大無遮会を行ない、大々的に反北宗キャンペーンを張つた。その記録が『菩提達摩南宗定是非論』であつた。慈恩義福が出世し、貴紳の帰依を受けるのは、荷沢の批判の時期と合致し、『定是非論』で普寂と共に批判の直接の対象者であつたのである。しかし北宗側は荷沢の批判をほとんど無視していた。安禄山の乱が北宗から南宗に逆転する力となつたのである。それは全面的に都の貴紳の帰依によつていた基盤が崩れ去つたからである。禅宗は地方の時代、南宗の時代へと展開していった。義福の栄進は北宗の全盛期を示すもので、価値ある碑となつて結実し、現在にまでその香りを残すものである。

次に禅宗から慈恩寺に入る人は、時代が下つて九世紀中葉、圭峯宗密（七八〇—八四一）の弟子の慈恩太恭であつた。しかし『景德傳燈錄』卷十三の目録に名を残すのみであるから、詳しいことは一切わからない。宗密は周知のごとく、華嚴と禪を円融させた人で、自らは禪では荷沢宗に属するとして、五祖に位置づけている。けれどもその弟子を見ると、京師の教寺に住していて、性格は禪宗というよ

りも教宗の色濃いものであつたとみられる。つまり教宗から禅宗への接近といえる。

(1) 『陝西通志続通志』卷二八、一八右。

(2) 従来、法堂を置いたことについて最初とされる人は、『禅林象器箋』に示されるように、牛頭慧忠である。しかしこの碑銘によつて、義福をもつて最初としなければならない。ただし百丈懷海のように、仏殿を建てずに法堂を建てたというものではなかろう。

(3) 『唐兩京城坊攷』卷四。

4 大興善寺

次に見学したところは大興善寺であつた。西安の街の喧噪はここにはなく、忘れ去られたような一角である。広い境内に伽藍が広々と建つてゐる。興善公園の一部となつてゐる。

大興善寺に住した禅僧は、馬祖道一の弟子の興善惟寬と圭峯宗密の弟子の興善太錫である。

大興善寺は朱雀通に面した東側の靖善坊にあり、一坊全体を占め、朱雀街を隔てて玄都觀と相対せしめた。隋の文帝が大興城を造営し、人望を収めるために、大興善寺を置いていた。大興は都城名、善は坊名の一字を取つたとされる。

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

神竜中（七〇五—七〇七）韋庶人が父の貞を追贈して鄂王となし、この寺を鄂國寺となしたが、景雲元年（七一〇）にはもとの名に戻している。宋の呂大坊は「城内に六岡の横列するあり。乾の六爻のごとし。はじめ隋の都を建つや、九・二をもつて宮室を置き、九・三に百司を処く。九・五は民をして居らしめるを欲せず。すなわち、玄都觀と興善寺を置く」として、特別の意味を与えたのであつた。大興善寺は仏教学の道場であつたが、また訳場でもあつた。中でも不空が最も有名で、天宝十五載（七五六）以後はここに居住し、『仁王護国般若經』などを訳した。⁽¹⁾

『景德伝燈錄』卷四の目録に、牛頭慧忠の弟子として興善道融の名が見え、この大興善寺に住したかのごとくに見受けられるが、それは伝燈錄の誤りで、福興道融のことである。実は道融は潤州上元県（江蘇）の福興寺に住したのである。⁽²⁾

興善惟寬（七五五—八一七）については『宋高僧傳』卷十、『景德伝燈錄』卷七に伝が立つてゐる。また白居易の「西京興善寺伝法堂碑銘并序」が『全唐文』卷六百七十八にあり、『文苑英華』卷八百六十六にも載つてゐる。これ

は法系・行実・禅法を述べたものである。興善寺の僧舎である伝法堂に惟寛が居住したので、碑銘に題されているのである。宋高僧伝及び伝燈錄は全面的にこの碑銘によつている。

興善惟寛の出身地は浙江の衢州信安県である。碑銘では西安という。晋以来信安といつていたが、咸通中（八六〇—八七三）西安と改めた。白居易は八四六年卒だから、信安でなければならない。古い地名を使つたことになる。宋高僧伝・伝燈錄の信安というに従うべきであろう。十三歳曇受について出家し、戒を藏崇、律を如証、大乗法を止観に学んだ。浙江地方は天台学の根拠地であるから、金華か杭州か台州で止観を学んだのであろう。二十四歳（七七九）具戒した。馬祖道一に学んだのは具戒前か後か明らかでないが、馬祖が洪州開元寺（江西南昌）に出た七七三年頃以後のことではある。馬祖門下の多彩な顔ぶれの一人である。馬祖寂後（七八八）、貞元六年（七九〇）閩越（福建・浙江）の間を行化し、七年会稽（浙江紹興）に藤家道場を作り、八年鄱陽（江西饒州）に至つて廻嚮（廻向）道場を作り、山神に八戒を受けた。十三年（七九七）嵩山の少林寺（河

南登封県）に入った。二十一年（八〇五、元和元年）衛国寺（洛陽殖業坊）に住し、翌年天宮寺（洛陽）に住した。元和四年（八〇九）憲宗（八〇六—八二〇在位）は惟寛を長安に召し、大安国寺（長樂坊）で見えた。五年麟德殿において法を問うていて、この時は大興善寺に住していたものと思われる。碑銘では、惟寛が住したので、その歳、枯れていた不空三蔵池に靈泉の蘇つたことを記しているが、池は大興善寺にあつたのである。元和十二年（八一七）の二月晦日、上堂して逝つた。寿六十三、臘三十九である。学徒は千余人に達するが、達者は三十九人、入室の者には義崇・円鏡がいた。灞陵は霸水の西をいう。西安市の東塔を元和正真という。灞陵は霸水の西をいう。西安市の東方である。霸水は藍田県南山谷中から出、灞陵古城（西安東十五キロ）の西から北流して渭水に合流する。霸水の西は丘陵となつていて、丘陵中に葬つたのであろう。『景德伝燈錄』には、義崇や円鏡の名は見受けない。惟寛晩年の弟子で、入寂後、白居易に碑銘を依頼した人ではないかと思われる。

白居易が太子贊善大夫だった時、それは元和九年（八一

四、四十三歳⁽³⁾の冬以後、翌年八月江州司馬に貶される間のことであつたが、惟寛の所に四度至り、四度質問した。

その内容が碑銘に記されており、伝燈錄にも記録されている。第一、無上菩提とは、身に被るのが律であり、口に説くのが法であり、心に行するのが禪で、この三の旨は一である。第二、心は本来損傷がないのだから、垢淨を論ずることなく、念を起こしてはならない。第三、淨を念ずることも病となるから、一物もとどむべきではない。第四、凡夫は無明で二乗に執著するが、それを離れるのが真修で、

真修は動ぜず忘ぜざることである、と述べている。第四の「不得動」が、伝燈錄では「不得勤」となっている。不得勤では自然外道に陥入ってしまうであろう。

馬祖下では三人が入内している。このこと自体馬祖教団の威勢を示すものである。既に禪宗は南宗の天下となつてきた。鷲湖大義が順宗（八〇五在位）に召されて入内し、章敬懷暉は元和三年以降（八〇八—）毎年入内し、そして元和五年には興善惟寛が入内したのである。問法は大明宮の麟德殿で行なわれた。

もう一人大興善寺に住した人が知られている。『景德伝

燈錄』卷四目録に、圭峯宗密（七八〇—八四一）の弟子の興善太錫の名がある。しかし詳細は不明である。

(1) 『長安寺院史料の集成と研究』六頁上に詳しく、また山崎宏『隋唐仏教史の研究』四七—六四、七九—八四頁に詳しい。また長安・洛陽の寺院については、平岡武夫編『唐代のしおり』六、七の『長安と洛陽』を参照している。

(2) 拙著『唐五代禪宗史』二六一—二頁。

(3) 『中國詩人選集』の高木正一『白居易』下、年表参照。

(4) 拙著『唐五代の禪宗——湖南江西篇——』一六九頁。

5 大薦福寺

禪宗では大薦福寺に章敬懷暉の弟子の薦福弘弁が住している。

大薦福寺は中央朱雀通りの東側、皇城の南の興道坊のそ南の開化坊にあった。開化坊の南半分が大薦福寺の境内であった。坊の西門の北側には法寿尼寺があった。大薦福寺の東半分は隋の煬帝の藩宅であった。唐に至り、文明元年（六八四）高宗が崩御して百日で大薦福寺を建て、僧二百人を度してここに居らしめた。天授元年（六九〇）薦福寺と改めた。中宗（六八四—七一〇在位、六八四—七〇四武后在位）が即位して（七〇五?）、大いに營飾を加え、神竜

二年（七〇六）には翻經院が置かれ、長安西明寺、洛陽大福先寺で訳業に従つていた義淨が、ここに移つて訳業を継続した。鑑真の師であつた道岸律師（六五四一七一七）が中宗の命を受けて新寺の造営に尽したのはこの時のことであるうと思われている。⁽¹⁾ 景龍中（七〇七—七一〇）、開化坊の南の安仁坊の西北隅に薦福寺浮図院が建つた。宮人が餞を出し合つて建てたもので、浮図院の門の北は街を隔てて大薦福寺の門と正対していた。これがいわゆる小雁塔である。華嚴宗の法藏はここで入寂（七一二）した。法藏は華嚴の宣揚に生涯を傾け、この塔にも華嚴塔と命名し、一名そのように呼ばれているのである。浮図十五級高さ三百余尺であった。明の成化二十三年（一四八七）、一帯に地震があり、塔は二つに割け、一尺あまりの空間ができるが、正徳末（一五二一）また地震があり、塔はもとのようになつた。この地震により上の二層が崩れ、現在の十三層となつた。このことが嘉靖三十八年（一五五五）八月二十九日の王鶴の「薦福寺題記」に記されているということである。高さ約四十五メートルの正方形の塔で、底層は約十一メートルで、広台の上に立つてゐる。南宋時代には、塔のほか

聖容院のみ残つてゐるといわれるようすに凋落がはなはだしいが、現在はもう一つ残つてゐる。清、康熙間（一六六二—一七二二）一婦人が武功河畔で、石上で衣を打つてゐると、石から響が出て数里の人が音を聞いた。これを掘り出してみると巨鐘で、そこで薦福寺に送り、寺鐘とされた。金の明昌三年（一一九二）製の二万斤の大鉄鐘であった。「雁塔晨鐘」として「関中八景」の一に数えられ、時の人によく樂まれていた。⁽²⁾

義淨（六三五—七一三）、実叉難陀（六五二—七一〇）がここで訳経し、靈異僧として知られる僧伽和尚（六二八—七一〇）がここで示寂し、華嚴宗第三祖法藏（六四三—七一二）もここで示寂している。金剛智は開元十八年（七三〇）から同二十九年（七四一）まで八年間住した。しかし一方この寺は民衆の娯楽の寺でもあつた。慈恩寺が最も盛大で、ついで青竜寺、そして薦福寺・永寿寺が続いた。

薦福弘弁（七八五—八六八）については『景德伝燈錄』卷九に載つてゐる。ただし宣宗（八四六—八五九在位）の仏法に関する問と弘弁の答のみが記録されているだけで、章敬懷暉の弟子であること、大薦福寺に住してゐたこと以

外はわからない。『仏祖統紀』では大中五年（八五一）の条に、

○召京兆薦福寺弘弁、入見。上問曰、何為頓見、何名漸修。対曰、頓明自性、与仏同儕、然有無始染習故、仮漸修、対治。令順性起用。如人喫飯不因一口便飽。帝説。賜号円智禪師。

と載せている。この文は伝燈錄または伝燈錄が採録したものに依っているはずである。弘弁は八刻（二時間弱）の間、間に答えたと伝燈錄でいっているから、入内して説法したものと思われる。その筆録されたものによつて記されたものであろう。仏祖統紀が大中五年とする根拠はわからぬ。伝燈錄では、紫方袍を賜り、円智禪師の号を賜つて、「仍勅修天下祖塔各令守護」と記しているが、仏祖統紀では大中十二年（八五八）のこととしている。すると弘弁の入内説法と直接かかわりないこととなる。もしもかわりあるとすれば入内説法は大中五年ではなく、十二年であつたことの可能性もある。

帝との問答の内容は、

問一、南北両宗について、答、もと南北なきも、普寂が師

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

の神秀を六祖とし、自ら七祖となつたことで生じ、開導發悟に違いのあることで南頓北漸となつた。

問二、戒について。答、防非止惡が戒である。

問三、定について。答、六根が境に涉つても、心縁が従わないことが定である。

問四、慧について。答、心境共に空にして、照覽して惑のないことが慧である。

問五、方便について。答、權巧の間で、中下には曲げて誘い、上根に無上道を説いても方便である。

問六、仏心について。答、人に智慧覺照があるのを仏心といい、心とは仏の別名である。形状なく、無始無終、無生無滅を靈覺の性という。

問七、仏を念ずることについて。答、如来には、上根には最上乗を開き、中下には、例えば韋提希の場合、十六觀門を開いて仏を念じて極樂に生ぜしめた。經に云く、この心はこれ仏にして、この心、仏と作る。心外に仏なく、仏外に心なしと。

問八、念佛、求仏について。答、如來の開讚は最上乘に帰する。百川が海に朝宗するが如くである。

問九、金剛經の無所得の法について。答、仏は一法として人に与えるものはない。人々の自性同一の法寶藏を示しているだけである。法は平等にして一切の善法を修しても相に住しない。

問十、師は祖意を会しているが、礼仏転經するか。答、住持の常法である。仏戒によつて身を修し、知識を參尋し、

梵行を漸修し、如來の所行の迹を履践するのが四報である。

問十一、頓見漸修について。答、頓に自性を明らめれば仏と同儕であるが、無始の染習のため漸修し、仮りて対治し、性に順つて用を起こすのである。

以上、問答の内容を簡略にして述べたが、仏祖統紀の引用は最後の問答を挙げただけである。この弘弁の答弁の内、第七問は、『楞伽師資記』道信章の『無量寿經』を引いて是心是仏を禪的に解釈した箇所と同じであるから、弘弁は道信の言葉を知つていたに違いない。即心是仏から非心非仏に轉じた馬祖教団は、もう一度源初に帰つて、即心是仏（是心是仏）を説いていると知られるのである。もつとも弘弁の師の章敬懷暉が非心非仏をとなえたのか、即心是仏

で通したのか明らかではないが、長安という土地柄、荷沢神会・南陽慧忠の影響は至つて大きく残つてゐるようである。頓悟漸修を説いているが、これは荷沢の所説である。また智慧覺照も荷沢の所説を思わせる。最上乘禅も荷沢の強調したところであつた。

(1) 『長安の寺院史料の集成と研究』一頁下。

(2) 『唐西京城坊攷』卷二、『長安寺院史料の集成と研究』二頁上下、陝西省文物管理委員会編『陝西名勝古蹟』上冊一六

一七頁。

6 法門寺

ここには石頭希遷（七〇〇—七九〇）の弟子の法門仏陀が住している。

法門寺は鳳翔とされているが、今の鳳翔扶風県にある。渭水を渡つて咸陽で西進し、武功を経て扶風に入る。『陝西通志統通志』卷二十八には、「法門寺は扶風県の北二十里にある。明の正徳中（一五〇六—一五二一）に僧澄段が修した。古塔四層なるは仏手の指骨一節を葬つたものである。唐の憲宗（八〇五—八二〇在位）は儀衛を盛んにして禁中に迎え入れた。そこで韓吏部が諫めた。塔の下層は大

きく、石の芙蓉（蓮）があり、工製は精妙で、一葉ごとに金錢を施した人の名が刻まれていて、数千人にものぼる。

宮女の名も多い。また白玉像を刻んで仏指骨を葬ったところに置き、金蓮花の中に琉璃の水晶匣が見える。法門寺は唐の憲宗が仏骨を迎えたところで、元和十四年（八一九）詔して改めて法雲寺とした。勅学士張仲素撰の碑があり、宋徽宗の讚と大書した皇帝仏國の四字が山門の上にある」と述べている。

一九八一年八月、亀裂していた塔の半分が大雨の続く中で倒壊した。一九八七年四月三日、宝塔を重建するため

塔基を整理していく中で、裂開していた石の隙間から、地下宮殿のあることを発見した。地下宮殿に収められた文物の中に仏の舍利一指があり、また豪華な埋蔵品は、現在、法門寺博物館に収められている。法門寺の歴史・文物等に関しても、『陝西珍貴文物叢書2』の『法門寺地宮珍宝』（写真集）（法門寺考古隊、石興邦選編、韓偉図版解説、陝西人民美術出版社、一九八九年三月）

雒長安『法門寺与地宮文物』（陝西人民出版社、一九八八年五月）

陝西省扶風県法門寺编写委員会『法門寺——仏舍利聖地』（新華出版社）、

許敏之『重修法門寺記』（陝西人民出版社、一九八八年九月）があり、また法藏と法門寺の関係について、鎌田茂雄「賢首大師法藏と法門寺」（『印度学仏教学研究』第三八卷第一号、平成元年一二月）

があり、また

「法門寺文物展覽与研究座談会紀要」（『中国唐史学会会刊』第九期、一九九〇年三月）

がある。

法門仏陀については、『景德伝燈錄』卷十四に僅か一則を載せていて過ぎない。師は常に一串の数珠を持って三種の名号を念じていた。一に釈迦、二に元和、三に仏陀、と。そして他はどんな椀躰丘なるぞ、といつて数珠をつまぐりながらくり返していた。椀躰丘の意味がわからない。事迹が常と異っていて、人は測ることができなかつた。釈迦とは真身舍利塔とは無縁ではないが、三に自身の名を挙げているから、仏と自己との同一性を言うであろう。元和とは年号であるが八〇五一八一九年在位の憲宗皇帝を指そう。

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

元和十四年（八一九）憲宗は皇室の儀仗隊を遣して仏骨を長安に迎え、自ら親しく大明宮光順門に迎拝した。これに反対したのが韓愈で、有名な「諫迎仏骨表」を奉っている。韓愈は怒に触れて潮州流された。真身舍利を奉じた憲宗を仏陀、自己と一体視している。

7 賢山寺

鳳翔地方では禅宗の僧と知られる人物が十数人いるが、地志を通して場所のわかるのは、法門寺と青峯山だけである。華嚴休靜の弟子の長興和尚及び風穴延沼の弟子の鳳翔長興和尚はどうも地名と思われた。地名が名として通ることはよくあるからである。例えば浙江では村の名が和尚名となつてゐる例があった。そこで長興というところがないか搜したのであるが、隴海鉄路の一地方駅名に長興という名が残つてゐることを知つた。扶風県に属する。鉄路は渭水の北側を平行して走つてゐる。とにかくこの辺に寺院があるか、もしくは跡のあつたところはないか聞いて回ると、駅の北方に一箇寺あるとのことであつた。駅の北の丘陵の南側にめずらしく天主教会があつた。きれいな建物で活動しているようである。その脇を少し登つて丘陵に入り、中

腹を川添いに東進すると、道の南側、丘の中腹に賢山寺があつた。地名は北里園といい、長興駅より四キロ離れている。賢山寺は新しく建ち、文明寺（知識文化を持った寺）を標榜していた。小刹である。住持は智廉師といい、七十歳は超えている。長興和尚について質問したが不明であった。侍者が付いていて、はきはきした方であつたが、やはり不明であつた。元代に咸豐和尚が国師として世に出てゐる、と住持は告げてくれた。賢山寺は創立年代不明、文革で破壊され、一九八五年より修復しているということであつた。寺の前に、

遊賢山寺記

明嘉靖十二年癸巳夏五月吉日

長安県知県河中楊博識

の碑があつた。一五三三年の碑である。

『陝西通志続通志』卷二十八の扶風県のところに、賢山寺は県の東南二十里にあり、塔がある。宋の淳祐五年（一二四五）建ち、元の泰定二年（一三二五）修した。相い伝うるに賢人が多くここに集まつたので名づけられた。旁に三洞があり、極めて幽邃で勝迹である、と述べて、長安令

歴官兵部省書楊博の遊山記のあることを付している。三洞

とは寺の北側の川べりの洞窟をいうがごとくである。三洞
あつた。現在、僧がいる。結局長興和尚はわからず、この
あたりに住していたのではないかと想像するだけとなつた。

賢山寺から長興に出て、岐山県を経た。岐山県を出たと

ころを寺頭という。玄奘三歳が經典を乾かしたところとい
われている。石柱和尚、招福和尚の住したところを捜す目
的で人々に尋ねた。招福は寺名であろう。石柱は山名のご
ときである。石柱というところが鳳翔あたりにあるという
返事で、勇んだ。蘇東坡が愛した東湖に立ち寄つたが、小
雨と時間の関係で見学するのはやめた。鳳翔に着いたのは
十八時であった。夏時間でもあり、まだ日が高い。地元の
地志研究者に会つた。年輩の兄弟であった。西安で地志編
纂にたずさわった方であり、学者然とした方々であった。
石柱・招福について尋ねたが不明であった。調べてわかつ
たら知らせてくれるという返事であった。宿泊地宝鷄に着
いたのは二十時を回つていた。

8 白馬寺

隴県文化館副研究館員胡百川氏に案内を請い、白馬寺跡

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

を訪ねる。

禅宗では白馬寺に竜牙居遁（八三五—九二三）の弟子の
白馬弘寂が住している。ただし『景德伝燈錄』卷二十の目
録に名をのせているのみであるから、何らくわしいことは
わからない。

地志では「白馬寺は州の南閥にあり、開元中（七一三—
七四一）に建つた。明の景泰正徳間（一四五〇—一四五七、
一五〇六—一五二二）にしばしば修した」という。白馬寺
跡は現在、隴県南大街にあり、県立幼稚園となつていて
（1）『陝西通志統通志』卷二八、八六左。

9 開元寺

地志では「開元寺は州の北一里の河北坂にあり、木塔七
級がある。唐開元中（七一三—七四一）に建つた。元の皇
統間（一一四一—一一四九）修し、明宣徳八年（一四三三）
重修した」という。今は隴县城関鄉尹家村という。千山の
南に開元寺跡があり、寺跡の南に隴川、川向う西南が隴県
市街である。寺跡は畠となつており、中に碑あつた。一つ
は「重修開元寺記」で、景泰六年（一四五五）六月上旬吉
日に建つたものである。隴州知州遲恭撰である。もう一つ

は字がつれぶていてわからない。千山は開元寺の背に横に延びた丘である。開元寺は隴県の中心寺院であつたろうが、禅宗関係の人は知られていない。

開元寺の碑記と陀羅尼經幢が隴県博物館にあると聞いたので訪ねた。經幢は唐代のものであり、重点文物单位（陝西）となっている。碑記は後代のものである。

（1）『陝西通志続通志』卷二八、八六左。

10 青峯寺

案内に加つてくれた方が自らの記事のある新聞を見せてくれた。紹介しよう。

一九八八年八月一二号『寶鷄日報』

太白県青峰山發現唐代僧人墓群

本報訊 最近、市文物普查隊在太白県青峰山發現一處重要的古代僧人墓地。

青峰山唐代為宮廷寺院、明代為王府山場、規模宏大、僧侶衆多、不同凡响、至今、原寺的鐵鑄板瓦、滴水等遺物、俯拾皆是。寺中僧侶円寂後即葬于山上。西峰是埋骨的主要墓地、東西長約七十米、南北約四十米、殘塔遺骸隨處可見、有些保留完整的石塔、造型別致、風格獨特。這一發現、為

研究唐・明兩代佛教發展的歷史提供了資料。（張天恩 肖琦）（筆者注：日本文字に改めた）

青峰山は以前からなるべく行つてみたいところであったし、新聞記事を見てますます行きたくなつた。しかし行程六時間、その内徒步二時間ということで、予定の行動からとてもその時間は見出せなかつた。完全な塔は十数基、不完全なものは百基にも及ぶということであつた。禪僧の塔という感じがしたので、臨濟何世、曹洞何世という文字がなかつたか聞いたが、わからぬといふ。碑文があるかどうか聞いても要領を得ない。まだ本格的調査には入つていないうようである。

通志には「青峰万寿禪院、即ち青峰寺は二寺あり、ともに寶鷄県の東南百八十里にある。上院は楚禪師の開山である。陳倉人（伝楚を指す）の有名な塔基の址はここに存する。下院は晋天福二年（九三七）に建つた。記がある」と記す。

『寶鷄縣志』によれば、「宋建隆⁽²⁾牒」に次のような内容を記す。顯德二年（九五五）五月七日（後周世宗）勅文で天下の僧尼寺院が停廢毀折されたが、諸寺は靈境古跡の寺が

多いから、残存しているものは留め、山下の下院があれば
これも同じく留めるようにといふ牒である。建隆元年（九
六〇）二月十二日の右僕射兼中書侍郎平章事、司空兼門下
侍郎平章事、司徒兼侍中による准勅の牒である。考証にお
いて、「太祖紀」を用いて裏づけている。

また梁鼎撰の万寿禅院記が載つていて注目に価する。

宋鳳翔府青峯山万寿禅院記

起復朝奉大夫右諫議大夫知軍府事安
定縣開國伯食邑七百戸実封三百戸賜

紫金魚袋梁鼎譲

右扶風郡、北盤岐山、南扼秦嶺地之形勝、甲於關輔。秦
嶺之南、蜀山北走、突霄摩霓、磅礴万里。至是崒然若奔、
而駐其秀絕者、曰青峯。涵碧孕翠、廻峭如削。自山麓、緣
危登陟猿徑、殆將百里。於是峯、人跡夐絕、窅若物外。中
有洞穴、深不可測。旧傳、阿羅漢隱息於此。然自昔未嘗有
精藍、天其或者必俟開土而後興焉。

同光中、有釈伝楚者。本陳倉人。幼抱高志、辭親隸道、

奄有頓法。遂荒智地、景行大迦葉、悟即心是仏之旨。乃曰、

昔人普詣百城、參契妙理。我雖懸解、豈廢規則。則故、南

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

之嶺外、東適江表、振錫法会、印可知識、僅逾一紀。長興
末旋、自吳会戾於故里。將為人天開施大法。

時清泰主潛隱斯地、為重法故、奉禪師、若保傅。遽請結
茅茲峯、以為禪宴之所。繇是經管結構、棟宇大備、峨峨梵
刹、不日成之。四方遊學歸之、與山谷曹溪相侔。

清泰中、以旧恩、降璽書、勞問賜命服及彰勝大師之号。
禪師受而弗有。昔賢首語文殊、一切無礙人、一道出生死。
禪師所伝、正得是法、直指本心、更無他要。故言下解脱者、
不可勝紀。化事云畢示寂遁去。即普天福二年秋八月廿二日
也。

禪師上足曰清免、善繼先志、亦獅子吼。免復去世。其法
季曰清悅、嗣之、悅終、免之門人曰義成、繼主其事。自肇
建禪宇、於今七十有三載矣。而未有刻石識其盛烈。嘗虞年
譖浸遠、後之人無以知所由來。會嘗予奉詔、仮守是邦、而
僧成條其狀願為之記、且曰、將俾斯文与是山共隆汚、謹弗
敢讓、而為之實錄云。

時景德二年歲在乙巳正月甲子

廬岳沙門正蒙3書

青峯伝楚の伝は『景德伝燈錄』卷二十に載つてゐるが、

ただ機縁問答のみで、僅かに涇州の人と知られるのみである。またその弟子の清免についても二問答を載せているだけで、青峯山の第二世であるということがわかるのみである。幸いこの院記によつて、万寿禪院と共に、二人のこともかなりはつきりしてくる。

『宝鷄県志』は考証において、梁鼎（九五五—一〇〇六）について述べている。字は凝正、益州華陽の人で、太平興國八年（九八三）の進士甲科で、景德初（一〇〇四）三班院に知し、銀台司兼門下封駁事に通進し、出でて鳳翔府に知した。以前母の老いたるをもつて、それで西京留司御史台を求めた。内難によつて起復したので、起復と文字を入れてあるというのである。梁鼎については『宋史』卷三〇四に詳しく載せてある。宋史によれば起復は咸平四年から六年（一〇〇三）までの間のことであり、多分六年であったろう。景德初めには三班院に知し、二年鳳翔府を知したが、母の老いたるをもつて西京留司御史台となり、三年（一〇〇七）五十二歳で卒したのである。

碑文によれば伝楚は陳倉の人であった。陳倉は隋に復して置き、唐に鳳翔と改め、また宝鷄と改めた。今の宝鷄を

いう。伝燈錄では涇州の人という。涇州は唐に復して置き、また安定郡といい、また涇州といった。今の甘肅涇川県北五里である。隴県の西北約八十キロ、鳳翔の北百キロほどに位置する。宝鷄の北方百三十キロも距てており、陳倉（宝鷄）と涇州を同一と見ることはできない。碑文と伝燈錄の成立はほぼ同じであるから、時代の先後を論ずることはできない。まずは地元の人の碑文の方を信すべきであろう。

幼少にして出家し、頓法をあまねく体得し、即心是仏の旨を悟つたが、疑团が氷解しても、古人のように（善財童子を指すか）諸方に行脚して、妙理に參契すべきであるとして、嶺南とは廣東、江表とは長江下流、それらをめぐり、知識から印可を受けた。伝燈錄では樂普元安（八三四一八九八）の弟子となつてゐるから、湖南澧州石門県の洛浦寺もしくは、後に湖南朗州桃源県蘇溪に住してゐるから、そこに参じたことをいうのであろう。吳とは江西高安に住して白水本仁に参じたことを指す。この間十二年を経ていたのである。

そして長興末（九三四、後唐閔帝の時）故郷に帰つてき

た。廢帝の時の年号を清泰といい、九三四年四月から九三年十一月までであった。それで清泰主といつてているのである。清泰主は潞王であった。明宗が將であった時、平山で掠めて養子とした。諱は從珂である。九三四年一月鳳翔節度使となつた。明宗が殂しても疾と称して来らず、朝廷に疑いをもたれた。三月には鳳翔が攻められた。しかし楊恩権などの寝返りによつて逆転し、反攻して長安より洛陽に入り、四月、帝位についたのである。「時清泰主潛隱斯地」とは九三四年一月から三月までのことで、この時伝楚を外護したのであつた。「遽請結茅茲峯」とは事態の切迫している様子を示している。伝楚が青峯山に結茅したのは九三四年初めであつたこととなる。しかし文意はそうであるが、伝楚が故郷に帰つたのは、樂普の卒年や白水に参じたことから推して、もつと早かつたであろう。清泰主に請われる前から故郷に帰つており、長興末に青峯寺が建立されてそこに住したと読み取らねばならない。潞王が帝となつたことで手厚い外護を受けた。そして紫衣ならびに彰勝大師の号を賜つたのであつた。碑文中、賢首が文殊に語る語は『華嚴經』の「賢首菩薩品」のように思われるのであ

るが、そこにこの語はない。「正得是法」といつてゐるから、伝楚は華嚴に造詣が深かつたと思われる。清泰三年（九三六年）十一月、石敬瑭が晉を立てて、唐帝は自焚した。伝楚は多くの弟子を養て、翌年の晉の天福二年八月二十二日入寂した。寿命はわからない。

伝燈錄では、伝楚について、「性は淳にして貌は古なり。眼に三角あり」という。樂普のもとで院主だった時、後に雪窟に住するであろうとの記を受けてゐる。故郷の青峯山に住することをいうのである。碑文には、洞穴あり、といつていて、符合する。その後、洞山の弟子の白水本仁（一九〇一～九〇四）のところに立ち寄つた。白水は、樂普の「生機の一路」を学んだ以上、「生路を止却して熟路上に來れ」という。伝楚は、生路上は死人無数、熟路上では活漢がない、と答える。白水は、それは樂普のことと、お前はどうなんだ、と問いただす。伝楚は、樂普だけでなく、夾山にもどうにもならない、と答える。夾山にもどうにもならないとはどうしてかと問うと、伝楚は、「言つたではないですか、生機の一路と」ときっぱり言い切る。白水の受けた洞山の法と、伝楚の受けた夾山・樂普の法とが火花

を散らしている。はつきりと家風の違いが見える。生機（サンキ）とは、生き生きしたはたらき、活作略をいう。

白水は生機をまだなまで熟していないという言葉に取つて、熟しきつた上で來い、とつっぱねる。伝楚は生機の一路では無数の死人を出すが、熟路では生き生きした人物は出でこない、と批判する。禪を学ぶ厳しさがひしむしと伝わつてくる問答である。

伝楚のあとを繼いだのは上足の清免であった。第二世となる。『景德伝燈錄』卷二十三に問答が一則載せられてゐる。祖師西来意を問われて、「禪池一滴もなく、四海自ら滔々たり」という。禪池とは阿禪達池であろうが、具体的には灌漑用の池のことであろう。陝西地方は秦嶺・終南山の北側で雨が少ない。逆にその南が多い。渴水で耕作に困

つてゐる現状をいいながら、厳しく禪の現状をいう。渭水、黄河は渴水期でも滔々と流れている。禪宗の法脈をいうのである。青峰山の現状を暗喩しているのかもしれない。南方では逆に禪宗の絶頂期にあつたのである。

清免のあとは「其法季」の清悦が繼いだ。第三世である。

清悦が伝楚の弟子か清免の弟子か曖昧であるが、法諱に清

の字が入つてゐるから、清免と兄弟弟子の、つまり伝楚の最後の弟子をいふとみてよからう。

第四世は義成で、清免の弟子であつた。「自肇建禪宇、於今七十有三歳矣」という。まだ石刻の寺記がないので、ここで青峯山の盛んなさまを記しておかねばならない、としたのである。景德二年（一〇〇五）碑が立つた。その七十三年前は九三三年となり、伝楚が故郷に帰つたとされる時とほぼ一致する。碑文の撰文は、書かれた景德二年正月だから、その前年となろう。とすれば、九三二年に青峰寺が建立され、伝楚が住持となつたのであつた。

青峰山にはもう一つ、元祐三年（一〇八八）四月十六日立石の「宋故青峯山宝月大師岫禪師龕銘」⁵もあつたはずである。

以上、万寿禪院記を通して、いささかの考察を試みた。

（1）『陝西通志續通志』卷二八、八一左。また「岐山県の南百五十里の青峯山上にある」ともいう。卷二八、七六右。

（2）民国、強振志編『宝鸡縣志』卷一四、一〇左。
（3）同、卷一四、一一左、一一左。
（4）『資治通鑑』による。

(5) 『宝鷄県志』卷一四、一五左一一六右。

11 金台觀

『陝西通志統通志』卷二十八に、「金台觀は宝鷄県の東北一里にあり、許張三丰修道のところで、章邱の李春記がある。元末に邑人の楊軌山等が修し、明の宣徳八年、侍郎張用澣が重修した」という。市中の丘の上にあり、一望に市街が見渡せ、南に渭水の流れも見える。建物の保存もよく、立派な道觀である。道教の貴重な遺産といえる。

12 張良廟

宝鷄より大散關を経る。鳳県から褒城そして關中に入る道を採る。陝西及び甘肅からの大動脈であるが、またこの一本しか道がない。先日來の豪雨で崖崩れも多く、道路もまた大層傷んでいる。更に小雨模様である。全くの山中の道路の脇に立派な建築物「漢張留侯祠」があつた。人のおとずれもない。屋根に草が生えているが、保存はよい。門前のひなびた茶屋で遅い昼食をとつた。格別おいしかった。

通志に「留侯祠は洋県の西四十里、雲山の上にあり。即ち子房山で、相伝うるに留侯が辟穀し、赤松子に従つて遊んだところである(1)」と記している。また「城固県の北十里

「実踐佛教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

の子房山にある(2)」という。子房山については「子房山は洋県西四十里にあり、留侯の辟穀の処と伝えられ、薬苗が多い。山は城固の界と接する(3)」という。また「白雲山は城固県東北三十里にあり、多く薬物を産し、俗に張良辟穀の処と伝えられる(4)」という。子房山は白雲山、雲山ともいう。

その他に知られるほどの留侯祠はないから、やはりここに立ち寄つたはずである。うかつにも私は鳳——留壠——褒城——南鄭の動脈を通つているつもりであつたが、子房山の位置はこの線上から相当はずれているはずである。道

をよく知つていて張運転手は間道を選んだに違いない。そして張良廟を紹介してくれたのであろう。たしかに途中からは車が少なく、漢水に出る手前で崖崩れのため大渋滞となつたのであつた。どのような道路を通つたのか問い合わせなければならない。

(1) 『陝西通志統通志』卷二九、八左。

(2) 同、卷二九、六左。

(3) 同、卷一一、二〇右。

(4) 同、卷一一、一五左。

13 梁山乾明寺

小雨まじりの日本の梅雨寒の気候である。漢中の西門の少し北から西方に向い、そして西北進する。漢水を渡つた正面に梁山が盤踞する。南鄭県である。今は中梁山といわず梁山といつてはいる。山を南に見て東に回る。碎石工場の脇から山に登つた。梁山乾明寺は中腹にあり、現在は農家となつてはいる。その南にレンガ造りの倉庫がある。共にもとの寺を使用している。その南に山門があつた。レンガ倉庫の西に方丈があつたという。現在は農地となつてはいる。農家の裏に大雄宝殿があつたという。すると農家は天王殿であつたろうか。農家の東に文字の彫られた石があるが、不鮮明である。ただし清末ぐらいの新しいものである。乾明寺の規模は小さい。眼下南に小さな湖が見える。川だという。雨中で視界が悪いが、風景は大変よい。山道はぬかるみ、足もとは至つて悪い。急な斜面で、牛が放牧されてゐる。

ここは投子大同（八一九一九一四）の弟子の中梁遵古の住したところである。遵古については詳しいことはわからぬ。

『統通志』に、「乾明寺は（漢中府）城西三十里の中梁山

にあり、宋淳熙八年（一一八一）新羅國僧が海を渡つて來り、ここに居て寺を建てた。中に池があり、冬夏涸れず、時に雲雨を出だし怪物を見る。今は亡(1)」といふ。また「中梁山は褒城県の南三十五里にある。麓に高陵を擁し、勢は穀を積むに似ていて、県の屏山である。三道あり。最東を相公嶺といい、原名は猴子嶺であつた。中は土地壙といい、最西は石梯口といい。石路崎嶇たり。南より北すれば井を下すがごとく、北より南すれば天巖(2)を登るがごとくである」云々といふ。また「中梁山は南鄭県の西十五里にあり、山脈は西の沔縣定軍山より来る。横山の腹に乾明寺がある(3)」といふ。そうすると私は相公嶺より登つたのであり、中梁山中の横山に乾明寺があるということとなる。

- (1) 卷二九、三右。
- (2) 卷一一、八右。
- (3) 卷一一、二右。

14 牛頭寺

漢中には他に牛頭寺があり、まだ寺を残していると聞いたので行くこととした。碎石工場に戻り、牛頭寺に向つた。

乾明寺より西進し、二十一キロのところで右に折れて漢水を渡つた。左（西）に折れれば四川への道となる。十キロで老道寺（地名）というところに着いた。西北進し、やがてぬかるみで車が動けなくなり、ほとんど歩行困難な道を一時間歩いた。小高い丘から牛頭寺が見える。二キロもないが、そこまで往復は一時間以上は覚悟せねばならず、あいにく雨となつたので、牛頭寺まで行くことは断念し、写真に納めるのみとした。牛頭山が寺の向うに壁のように立ちはだかっており、寺の後が大きく崩れている。右奥深くはるか遠くに長い瀑布が見える。山の手前に建物が少し離れて二棟見える。これが牛頭寺と思われる。農家となつているらしい。二棟の左手前に数戸の集落が見える。

「牛頭山は褒城県の西二十五里にあり、その近くに仙人洞があり、漢水に臨む。高さは百仞、その上は雲が笠のようになつていて、故に後人は戴笠山といつてゐる。山に巨石がある」。⁽¹⁾「崇慶寺は褒城県の西二十五里の牛頭山下にある。唐僧洪哲の道場である。俗に牛頭寺と呼んでいる。唐の貞觀間法融師が立てた。寺の後二里に千仏洞がある。二十里

は牛首前庵とする。また十里は中庵とする。また二十里は後庵とする。皆古今の名刹である」。⁽²⁾

帰途、土地の人々に牛頭寺についてたずねた。予想した二棟がやはり牛頭寺であった。天王殿が文革で破壊された。六つの院があつた。唐代に建立したのであるが、裏山が洪水で崩れ、寺は壊滅した。現在のものは景德（宋代）からのものである。唐碑・明碑があつたが、地中に埋めてしまつた。知つてゐる農民はその場所を教えない。以上の断片的内容であつた。通訳の白氏にもなまりが強くて半分しか聞きとれないということであつた。通志で、貞觀中に法融師が立てたといふのは、牛頭宗の初祖法融に当てはめた訛伝であろう。ただし法融は長安に出てゐるようであるし、また牛頭宗七祖とされる人が長安近辺にいたらしいので、あながち虚構とのみ言い切れないところもある。

(1) 『陝西通志統通志』卷一一、七右。

(2) 同、卷一九、五右。

15 石泉県政府招待所にて

石泉県に着くと県政府弁公室副主任辛建氏が対応してくれた。また安康外事弁公室主任兼安康旅遊局局長上官衛国

氏がわざわざ出迎えに来て下さり、丁重な対応に感謝する。
観光弁公室室長の接待で会談。
。安康市内東方三キロに金堂寺現存
。安康市北方五キロに万春寺あり
。安康市南方嵐皋県筆架山に、一七五〇年前の弘一遠鑑法師の真身が保存されている。

。泰山廟には舍利塔が百基ぐらい林立している
昼食後記念写真を撮り、安康市に向った。

16 万春寺

万春寺について『続通志』による予備知識は次のとくであった。

旧州江北岸七里にあり、先に万頃寺と名づけた。州の南の高岡の上にあり、後に今地に移した。そして名を万春と更えた。唐の懷讓祖師に創まる。明の嘉靖四十年（一五六一）重修。林木が鬱叢している。昔、大竹千竿あり、山門を入つて東に折れると天王殿となす。中に平地あり、露台を築いて古殿を建てた。五楹中の諸仏像は皆甚だ古い。廻廊が四周し、僧寮がこれを環る。殿後に東に転ずると白蓮池があり、その上は陟壁、登るべからず。寺前に万春洞

あり、洞内外、皆唐・宋・明人の題名で、中に觀音大師像が坐している。即ち唐の咸通十二年（八七一）の塑である。本朝順治十六年（一六五九）重修する。康熙二十三年（一六八四）知州李翔鳳が、白雲深處、の四字を洞門に刻した。その下に南嶽禪師白雲泉があり、一名卓錫泉で、一郡の名勝である。⁽¹⁾

ここは当初から最も訪ねたかったところである。ここが南嶽懷讓⁽²⁾（六七七—七四四）の住したところである。安康は金州ともいつたが、南嶽の生まれたところ、もしくは本貫であったということは知られているが、ここに住したといふことは全く知られていず、私も通志を見るまでは知らなかつたので、強く興味を引かれたのである。

市より少し入つたところで下車し、歩いた。丘陵となり一面畠である。湿気の多い猛暑で、汗は流れるようであつた。一画に林業研究場があり、その東の丘と丘の狭間となつたところに万春寺があつた。現在林業事務所となつていて、仏教活動はない。古くは一帯が樹木で一杯となつていたようで、今全面畠となつていて反省が加えられ、適した樹木を求めているようである。境内地が一段と高く

なつてるので、地志でいう露台なのであろう。管理事務所が本殿であったようであるが、他は何もない。記事で想像される程の規模ではない。寺の前に古い小さい洞があり、

石壁に記や詩の彫られたようすがわずかに見える。文字は判読できない。地志でいうのに違わない。洞内には観音大師の塑像も何もない。觀音大師とは南嶽をいう。咸通年間には像が祠られるほどになつていたのである。南嶽——馬祖の法系が禪宗を席巻し、南嶽の故郷が縁ある地として、この土地の人たちに顕賞されていったのであろう。南嶽がこの土地に住したとすれば、六祖に参する以前か、得法の後で南嶽に入る前ということになる。どこまで真実かは定かでないが、八百年代の半ば頃にはそういう伝承のあつたことを知らないということはできない。

- (1) 『陝西通志続通志』卷二九、一三右左。
(2) 拙著『唐五代の禪宗——湖南江西篇——』十頁以下に南嶽のことは詳しく記したので省略した。その時点では万春寺のことは知らなかつた。

付記。上官衛国氏より、徐信印編著『安康史略』(陝西三秦出版社、一九八八年一〇月)をいただいた。五十四~五

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

頁に懷讓について、安康歴代名人の一人としてとりあげている。ただし從来知られているところを出るものではない。

17 金堂寺

『続通志』に、金堂寺は州の東五里の南山下にあり、宋の嘉定六年(一一二三)建つた、と記す(卷二九、一三左)。淨土教の小規模の寺院であるが、僧が何人かいて、仏教活動がしっかりと実践されている。住持觀文老師と上官氏をはさんで会談した。南嶽について聞いたが何もわからなかつた。

白雲寺(市西南十五キロ)があり、仏教の実践活動が行なわれているということであつたが、時間もなく断念。天柱山(西南四十里)は唐代のもので保存されているとのことである。

寧鄉県に觀音山がある。南嶽に關係するところで、觀音大師といわれるのも、山名と関係あると思われる。西安に帰る方面、ここから約百五十キロぐらいである(通志では州の北百三十里という)。帰途山を見ることができるか尋ねたが、無理ということであった。

18 新羅寺

「実践仏教の伝播に関する研究」現地調査報告（鈴木）

ついで新羅寺の位置を確めにいく。通志に「新羅寺は州治の西六里にあり、懷讓禪師の庵がある⁽¹⁾」という。新羅寺は漢水の中にあつた。河中より大鐘が発見されたので、位置が確かめられたという。大鐘は現在、市の東方五キロの公園の中に保存されているとのことであつた。昔の漢水は現在の東岸上道路付近であつた。従つて新羅寺は川の西の川についたところであつたことになる。

通志に「三教山は州の北百二十里にあり、山は甚だ高く、二竜湫がある。相い伝うるに南嶽禪師の道場であつた。二竜が得度し、報いるに甘泉をもつてした。その旁らに喬松があり、遊戯し繞ること三匝した。上に旧痕が宛然としている。歲旱には雨をここに禱る」（卷一二、一左）という。南嶽の道場とされていいる。

夜九時上官氏の宴席の接待を受けた。

(1) 『陝西通志統通志』卷二九、二三右。

付記。翌日石泉より北進、終南山の麓を通り、子午道を経て西安に戻つた。すばらしい風景であつた。次に長安に戻つた後、見学した各寺について述べねばならぬが、締切

が迫つたので、別の機会に譲る。